

3.11 そこから。

はっとりいくよ(東京より避難)

2012年の年明けとともに、3・11以来不安定だった日々、やっと息がつけたことに気がつきました。

この建部の地に住む場所を提供いただき、先の見えない不透明な毎日が少し変わった、そして、変えたいと思えるようになったと思います。さまざまなかたちで支えてくださる皆さまに、感謝してもしつくないほどです。心より感謝いたします。

昨夏、保養と移住の検討のため、小さな縁を頼りに東北の津山へ、子ども2人とともに東京から避難してきました。車1台に運べるものだけ積んで、いつ戻るかも想像できず、まずは安心して息ができるところに行きたい、ただその思いだけやってきました。

テレビのニュースで流れる情報からは想像が難しいであろう、私たちのような避難者の存在。地元の方々の目に、どう映るのだろうと不安な気持ちもありました。ですが、ご近所の方々は、ひと言ひと言に耳を傾けてくださいました。そして、日毎たくさんの方々が、福島

みならず、関東でも起こっている放射能汚染のことを気にかけてくださり、支援の申し出もいただきました。少しずつ、いつもつきまといいた旅行者のような感覚も薄れ、地元の方たちとの交流が生まれ、落ち着き始めていきました。

しかし、手放して安心することはできませんでした。年内にも3月にも東京へ帰れそうにない、それどころか数年、いえそれ以上無理なのではないかと思わざるを得ない、後から後から発表される汚染の実態、そして今なお収束をみない福島第一原発の状況を考えると、事態を受け止め、「戻らない」ことを決めるときがきたんだと、実感してきました。別々に暮らす夫との行き来と、私の仕事の都合のこと、他にもさまざまな問題を考慮し、新たに腰を据えられるところを探さねばなりませんでした。

津山での日々が経つに連れ、子どもたちも学校や園に馴染み始めてきていました。なので、再び移動を繰り返すことを改めて考えると、この子どもたちにとってどれだけ負担になるだろうか、やはり移動は諦めざるを得ないかもしれない、決断できないぎりぎりの迷いの中、ご縁を繋いでいただき、建部の住居が決まりました。

3・11まで、当たり前前に繰り返されていた日常。多くの友人やクラスメートは残るのに、「放射能」から逃れるために覚悟した避難。家を去った私たち家族にとって、どれほど「日常」の感覚が大切か、さまざまなシーンで痛感しました。それができなくなってしまうのです。幼い子どもとの日々、繰り返しやってくる毎日や季節は、安心してこの世界で生きていけることを認めてくれる、「日常」。それを子どもたちはきつと、生まれてから常に肌で感じ育まれていくのだと思います。

今までも私が子育ての中で、とても大切にしてきたことです。

それ故なのでしょうが、原発事故直後、本当はすぐにも避難をしたかったのに、それができませんでした。あのときは、なにこともなかった昨日までの当たり前の幸せを、当たり前すぎて「幸せ」とも感じなかったかもしれない、その「日常」を、すぐにでも取り戻したい気持ちで必死だったのだと思います。震災の被害は東京から遠い東北地方でしたが、関東でも子どもが心理的に受けたショックはただならぬと感じ、できるだけ、いつもと変わらないよう過ごしたい気持ちが非常に強かったと振り返ります。こういう時こそ、日々大切にしている生活のリズムをなにより優先したかった。関東に大量の放射能が到達したとされる3月15日には、子どもたちが通う園のそばに待機して備えていました。毎晩夫と、明日はどうするか、通わせるのであれば、もし万が一何かあってもこれは自分たちが選んだこと、後悔しない、と何度も何度も確認をして、いつも送ってきた「安定した毎日」が送れることを優先することにしました。その決意が本当に良かったのか、今でも毎日振り返ります。そして、母親として、やはりなかなか認めることができない気持ちがあることは否めません。

少しでも落ち着いた「日常」を求め、新たな移動を決意し、津山から引越することになったとき、決断したこととは言えども、お別れはとて悲しいときでした。「理解をいただいていた小学校、保育園、そして地元の方々皆さんのご好意を無下にしてしまっていないか、申し訳ない気持ちでいっぱいでした。

忙しく引越しを済ませ、建部での生活はスタートしたばかりです。にもかかわらず、多くの方々との出会いに救われ、またたくさんの手

助けをいただき、本当に感謝しております。「ありがとう」を伝える機会が今まではないほど、とても増えていることにも気づきました。また、少しずつ少しずつ、新しい土地での新鮮な経験、楽しみや喜びに後押しされ、大地に根を張る草木のように、今までも大切にしてきた「日常」が得られていることに気づきました。

そして、自然の豊かさの中に生活が存在する感覚は、心身が安定していくのに大きい影響を与えてくれていると実感しています。生まれも育ちも関東地方である私には、ここ、岡山の四季のうつろいは初めてのもので、新しい感覚や経験がたくさんありますが、その緩やかに変化していく日々や季節、自然の様子から、「安心していいよ。」と声をかけられているような気がしています。もちろん、自然の持つ、厳しい側面もあるでしょう。それをも踏まえて、自然に対する信頼のようなものを感ずるのだと思います。

時には、新しい土地の風景の中に、帰ることを躊躇している場所の記憶を見つけることもあり、とても悲しくなります。野焼きの匂いや朝のつんとした空気の冷たさに、落ち葉の下から芽吹くヨモギの新芽に、鳥の鳴き声に、帰れない家を思うと、胸が締めつけられます。その気持ちをそっと自分の中に認めつつ、目の前にある風景、自然を眺めます。大地に根を張ろうとする、草木のように。

3・11は、とてもとても多くの悲しみと犠牲をもたらしました。ですが、同時に、自分がどのように生きていくか、しっかりと向きあうことを気づかせた契機となりました。そのスタートラインが、自然豊かな、この建部の地から始まるのが本当に嬉しいのです。この契機の意味を決して忘れず、祈りと共に、日々を紡いでいきたいと思えます。